

Ψ木バブSTORY サイキック魔王のΨ難

殺六縁起

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

齊木楠雄が男鹿辰巳に巻き込まれる物語。 石矢魔と左脇腹町は隣町という設定。

目次

暴れオーガのΨ難の始まり	1
Ψ恐の侍女悪魔 ヒルデガルダ登場	5
魔王のΨ覚！ 動き出す謎の組織	10
石矢魔 東邦神姫編	
窪谷須のΨ戦 東邦神姫の1人神崎登場！	16
神崎一のΨ難 ダイブは突然に	20

暴れオーガのΨ難の始まり

僕の名前は斉木楠雄 超能力者だ。

突然だが悪魔を信じるだろうか？ 以前は神や幽霊を信じていなかった僕は当然信じてなかった。この時まででは…

現在僕は地元の左横腹町の隣町、石矢魔に来ている。ここは名前の通り治安が悪い なぜならこの街にはヤンキー率120%の石矢魔高校があるからだ(他にも理由があるが。)そこには組のボスの坊ちゃんやとある財閥の坊ちゃんや暴走族を1人で全滅させるヤツなどいろんな意味で化物が集う、その中でも最近頭角を現わした暴れオーガがいるらしい。…まあ、そんな僕の目指す普通とは対極の奴らがウヨウヨいるこんな街はきたくはないが、最近オープンした店で美味しいコーヒーゼリーが食べられるというステマを聞いたので来たのだが、『全員土下座!!!』

川で土下座をさせられている不良とそれをあざ笑う不良がいた。

ああ、悪魔がいたらあんなのだろうか。

「いやーすみません。男鹿君があまりにも無防備だったからつい、チャンスだろうと…」

「チャンスじゃねーよ。あれ、俺じゃなかったら死んでるぞ?」

と、男鹿の後ろに鉄パイプで貫かれた男鹿の鞆があった。

窪谷須並の回避力だな。

「アハハハッ そうですよねー。」 『死ねば良かったのに…』

と、小声で呟いた不良に男鹿は…

「ブボロロロロツ!!!」

川に不良を洗濯しに行った。

「落ちるのかなー? この汚れ?」

落ちないだろう。少なくともお前の心の汚れは。

するとドンブラコッコとでかい血だらけのおっさんが流れてきた。

「なんだ？あれ？」

(引き上げてくださいよ！ 貴方こそがぼっちやまにふさわしい親になるでしょう。)

あんな変なの引き上げるわけないだろう。 といひかなんでボロボロなんだ？

(なんだ あのおっさん ? 取り敢えず引き上げるか！)

引き上げるのかよ！ あんなのは無視した方がいいだろう。その不良はおっさんを引き上げ、いきなりチョップした。

(桃太郎式チョップ!!)

なぜ割る！ といひか何故チョップ？

すると中から赤ん坊が出てきた。

なんか出てきた。 なんかキモイ出かたした。

「なんだこいつ？ 取り敢えずこれは大人の対応をすればいいのか？」

このまま置いといたら捨て子になるからな 正しい判断だろう。 保育所に預けるべき…

「ヤア、僕、 迷子!？」

と、鬼の形相で挨拶した

燃堂といい勝負だな。そんな顔をしたら大人から子供まで泣くぞ。

「アーイ！」

だがその赤ん坊は目を輝かせていた。

「なんだこんな感じじゃだめか」

「ヨーシ、ヨシヨシ!!」

「オラア!! 蠟人形に シテヤロウカ!!!!」

「アーイ!!!!」

するとその赤ん坊はメツサ懐いた。

「めっさ 懐いた…。」

なんだ？あの赤ん坊。 めんどろな事が起こる前に店に行くか。

僕は2人を無視し、スイーツ店に行こうとしたが…

「おい、兄ちゃんよく？」

男鹿の間を見てさつきまで土下座をしていた不良が僕の前に立ち塞がった。

「ちよつくらカネ貸してくんね〜？」

それはお前らの感謝料か？ そんなボロボロの見た目なら誰もビビらないぞ。

(なんだこいつ？ ビビらねーぞ！)

(クソツ 身体が痛てー！ 男鹿の野郎 覚えとけよ！ こいつから感謝料貰ってリベンジだ！)

こいつら…

(?)(?)

墓穴を掘ったな。

「ギャーーーーー!!!!」

さて、スイーツ店に行くとするか。

僕はボロボロの不良を更に死にかけに追いやりスイーツ店に行つた。

Ψ恐の侍女悪魔 ヒルデガルダ登場

僕は石矢魔にあるスイーツ店に行き、パフェを堪能したあと隣町へ瞬間移動しても良かったがあの赤ん坊を連れて帰った？ 男鹿という不良が気になり辺りを搜索していた。

あの死にかけのおっさんも気になるが …ん？ と、前回叩きのめした不良達はいなかったがおっさんがまだいた。全身血だらけであれでなんで生きてるんだろうな？

「む？ おや、なにか私に用でしょうか？」

その前に体の血を拭け、カオスな感じになってるぞ。

僕は血だらけのおっさんにタオルを渡した。このタオルはアポトで無料で出される銭湯からアポトしたものだ。

「おや、ありがとうございます。私、アランドロンと申します。」

それから僕はなぜあのような状態になったのか問いただした。

「ハッハッハー この格好は私がボロボロなら絶対引き上げてくれるだろうと思ひ塗りたくったのですよ。 あ、この矢も見せかけです。」

こんなボロボロの奴誰も引き上げないぞ。普通…一目散に逃げるぞ。

「そういえばあなたはあの時いましたね。 ぼっちゃまはどこに行きましたか分かりますか？」

さあな、あいつの事はほっておいてスイーツ店に食べに行ったからな。

「そうですか。ならヒルダ様に頼みますか。」

ん？ ヒルダ様？

その頃男鹿辰巳は古市に赤ん坊を押し付けに行っていた。

「アホだ…こんなアホ見たことない…」

「さあ、古市君 話の続きだ。」

「アイダブ！」

「心優しい男は驚きました。「もういいよ、それ。腹立つんだよ!!」

「それからいろいろあつて…めっさ懐いた…」

「……………」

絶句する古市。自分の知り合いにこんなバカがいたとは思っても
みなかったようだ。 いづれ起こるであろうΨ難はちよつとした
分岐点で回避できるが古市はこう思った。

(そんな赤ん坊俺んちに持ってくるなよ…)

「なついただと？」

その時、窓から女の声が聞こえてきた。

男鹿と古市が窓をみると怪鳥に乗る1人の黒いメイド服のようなものを着た金髪の女がいた

「貴様ごときぼっちゃまがなつくわけが無かろう…。」

「だっ…誰ー!?!」

「あん？　なんだお前？」

「フツ」

男鹿と古市を見て微笑したその女は赤ん坊の所へ寄ってきた。

「さあ、坊っちゃま、行きますよ。」

(坊っちゃま?)

さつきまでの顔とは一変して優しい顔になり手を差し伸べた。

だが…

「プイッ」

「な!?!」

「ププッ　嫌われてますな〜!」

男鹿は慌てて赤ん坊を引っ張る女を見てゲラゲラ笑った。

(嫌な顔)

「坊っちゃま!話してください!　こんなもの」

その時赤ん坊は泣く五秒前の顔だった。

「お、おい?」

古市が声を漏らした直後、家中に電撃が走った。

「ビエエエエー!!!」

「ハガッ!?!」

一方、その頃男鹿とおっさんは

つまり、あの赤ん坊は魔王カイゼル・デ・エンペラーナ・ベルゼバブ4世ということだな。…長いな。

「そういうことで私は坊っちゃんを見つけないけません。」

そんな秘密を赤の他人に言うのはどうかと思うが…

プルプルプル…

と、その時アランドロンから音が聞こえてきた。

すると…

パッカー

なっ!?

アランドロンの体が二つに割れた。そして中から赤ん坊…ではなく携帯電話のようなものが出てきた。

「もしもしヒルダ様。 ああ、ハイハイ、分かりました。 え?

そうなんですか? あらまあ。 は! なんですよ! それは

大変です!! あ、ではそういうことで…」 ピッ

驚くのか納得するのかはつきりしろ。 …で、何だった?

「ええ。 話が決裂したそうです。」

と、その時近所から破壊音が聞こえてきた。

(おい、聞いたか？ 暴れオーガが女に追われてるらしいぜ！)

と、テレパシーで聞こえた。

あいつ、やはり巻き込まれたな。

魔王のΨ覚！ 動き出す謎の組織

アランドロンと斉木楠雄が話した数分前…

古市の部屋で謎の赤ん坊の電撃？ により黒焦げになった男鹿、古市は同じく黒焦げになった金髪女、侍女悪魔のヒルダという悪魔からその赤ん坊はカイゼル・デ・エンペラーナ・ベルゼバブ4世だということを知られた。

「つまりあなたは選ばれたのです。 魔王の親に…」

しばらくの沈黙の中口を開いたのは男鹿だった。

「ふざけんな！ たった赤ん坊に懐かれたぐらいで親になれだの言いやがって!!」

「つまり、断ると?」

「たりめーだ!!」

その言葉を聞くとヒルダは微笑み、男鹿と古市にこう優しく呟いた。

「では死んでください。」

その瞬間、古市の家は半壊した。

そして玄関から猛スピードで逃げる男鹿と古市。

「なんだ？ あの女！ 人の家をメチャクチャにしやがって!!」

「俺の家だぞー!!!」 ふざけんな！ 毎回毎回こんな目にあわせや

がって、弁償しろよー！ マジで弁償しろよー!!俺の家がー！ 俺の家がー!!!」

泣きながら叫ぶ古市。

「安心しろ！俺は大丈夫だ。」

「大丈夫じゃねーだろ！ てか：何背負ってんだよ!?」
(?!)

古市の指摘を受けて男鹿が振り向くとあの赤ん坊がついていた。

「おい、悪魔が取り憑いてるぞ！ 男鹿！」

「てっテメー離れろ！」

男鹿が引き剥がそうとしてるうちに前の電柱の上にあの女が立っていた。

「無駄な足掻きを！ 悪魔から逃げられると思うな！」

決めポーズ？をとっているヒルダに男鹿が思いつきり突っ込んだ。

「ヘンツ 一生そこでカッコつけてろ!!」

通り過ぎる男鹿達にヒルダは次の行動に出た。

「よかろう…アクババ！」

そう言うヒルダの背後に黒い影が飛んでいった。

「キョエー!!!」

男鹿たちの前に何かが降り立った。

「あつ悪魔…」

古市は絶句し慌てふためいていた。彼らの前にいるのは怪鳥。ヒルダが連れてくる悪魔だ。

「男鹿キーツク!!!」

をあっさりキツクでぶっ飛ばした男鹿。

「なっ!?」

それを見て驚くヒルダ…本来なら人間が悪魔にしかも初めて見る悪魔を何もためらいもなく蹴り飛ばす奴など稀にいない。そしてそれを見た古市は

「お前のそんなとこ本当、尊敬するよ！」

そしてなんだこんだ川近くの僕とアランドロンが休んでいる場所の近くにやって来た。…やれやれだなやはり僕も巻き込まれるのか…

そして現在…ついに追いつかれた男鹿はヒルダに頬を剣に突きつけられた。

「悪魔は契約にうるさくてな。死ぬ。」

「アウツ」

ん？　なんかやつてきたな…

「男鹿！　今日でお前は終わりだ！」

辺りに男鹿に恨みを持つ不良が男鹿が女から逃げているという噂に耳にしてやって来た。

男鹿の頬が剣で血が滴り落ちる。

だが僕は気づいた。赤ん坊の高感度が著しく低下していることに。高感度が分かるのはテレパシーの応用により高感度メーターにより表示される数字。その状態は子供なら大泣きする状態の時に起こる。遊太の痲癩で知っている。だが魔王の赤ん坊だどうなるか…

「ビエエエエー！！！！」

…
だがその時赤ん坊が急に泣き出した。しかも電撃を無造作に放ち

あの赤ん坊…まさか…！

考えが甘かった。そう思うわざる得ないな、僕は咄嗟に瞬間移動した。その直後電撃が飛来した。

やれやれ、間一髪だったな、あのまま電撃を受けたら制御装置に異常が出たかもしれないな。まあサイコキネシスで防げたが…あ。

「あれ？お前何処から？」

なんと瞬間移動の先が古市の横だった。

「それよりなんだこれ？　どうなってるんだよー！痲癩？」

その時電撃を免れたヒルダが見えた。

「坊っちゃん。駄々をこねないでくださいまし！」

「駄々？　これってそういうレベル!？」

思わず突っ込む古市。その頃僕は電撃の中心にいる男鹿を見て僕は思った。

やれやれ、電撃のおかげでごまかせたかな？しかし、これではあの男鹿は助からないな。見殺しは少し良心に触るが…帰るか。

僕は騒ぎの中、こそつと帰った。

「あれどうにかならないんですか？」

「止められるのは大魔王様くらいしか…」

だがこのあとヒルダが見たのは電撃が治まりベルゼバブの頭を撫でる男鹿だった。

「男が…ギヤアギヤア泣くんじゃねえ

ナメられちまうぞ」

ヒルダは驚嘆した。自分でも抑えられない主の力を1人の人間が止めたからだ。

（私にも止められなかった大泣きをあれだけで…いや、驚くべきところはそこじゃない。そもそも魔王の親とは坊つちやまが人間界で魔力を使うためのいわば触媒のようなもの。ただの痲癩でこれほどの力を引き出せたのは 紛れもなくこの男の親としての資質…!!）

男鹿はベルゼバブを残し去っていった。

（決まった…）

ピキッ

あの男―只者ではないな。しかし、今ピシッて音がした気が…

と、僕が音の方を見た瞬間、電撃を食らった鉄塔がベルゼバブに向けて倒れてきた。

「坊つちやまー!!!」

が、ヒルダよりも先に男鹿が飛んできた。

（何やってんだ!?ーオーオレ）

「おおおおおおおおおっつ」

倒れてくる鉄塔。男鹿は潰されてしまう死のまぎわに無意識にベルゼバブの魔力を開放し鉄塔を消し飛ばした。

これが魔王の力か…恐ろしいな。

そして僕に新たなΨ難がやって来た。それはさつき、男鹿が消し飛ばした鉄塔の破片それでも人間3人分の大きさの鉄の塊が飛んできた。

ドガーン

まあ、このくらいは消せるがな。それよりも使わざるを得なかった
：コイツの前でな。

僕から少し離れた所に1人の男がいた。ネクタイをしたビジネスマンの服装に整った髪型。しかし何処か怪しげな雰囲気を出していた。

「蠅の王の末子はその男を選びましたか：魔力の耐性があるみたいで
すし、なかなかいいじゃないですか。 商會に戻りアイリス様に報告
するとしますか。」

（しかし、最後に見たあの少年の力はなんだ？ 後で調べる必要が
ありますね。）

見られたな……ここで口封じを!!!

サイコキネシス!!!!

（気づかれましたか！ のんびりはできませんね。）

その男は口から下を出し丸いビー玉のようなものが乗っていた。
「では、さようなら不思議な少年君。」

フッ

その男は消えてしまった。サイコキネシスは誰もいない所を攻撃し壁に大穴を開けた。

商會：そしてアイリス。悪魔以外でも何かあるようだな。もしか

したら僕以上のΨ難にあの男は会うかもしれないな
僕は力を出し切り、気絶する男鹿を見ながら少し同情した。

その後、男鹿家にベルゼバブもとい、ベル坊とヒルダが居候し、半
壊の古市家にアランドロンが居候した。

「なんで、俺だけこんな目にー！」

古市の叫びは誰の耳にも入らなかった。

石矢魔 東邦神姫編

窪谷須のΨ戦 東邦神姫の1人神崎登場！

鉄塔の消滅事件の騒動が収まった頃、斉木楠雄のクラスで1人悩みを抱えた男がいた。

（ダチがやられて半年…とうとう奴が帰ってきたぜ！隣町だからと
いってみすみすこの俺がこんなチャンスを逃す筈がねーだろ！
待っているよ！石矢魔東邦神姫の1人神崎一 ダチの敵は俺が
とる!!）

不良時代の復讐に燃える窪谷須亜蓮だった。

やれやれ…またあの高校に関わるのか…

その頃、隣町の石矢魔高校では

「あのヒルダメ！俺にベル坊を押し付けやがって！」

最近、赤ん坊を背中に乗せ『子連れ番長』と呼ばれる男男鹿辰巳が
廊下を歩いていた。

「ダブー…」

とベル坊が今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「あん？ どうしたベル坊…あ、待て！ 泣くなベル坊!!お腹が空
いたんだな！ ミルクを…！無い!!しまった忘れてきた!!! 代わり
のもの…」

男鹿が辺りを見渡した。 その時目の前に自販機が見えた。だが

！

「牛乳…売り切れ!？」

ミルクの代わりになりそうな牛乳のボタンには売り切れの文字が出ていた。

「くそ！ 代わりのもの…あ！」

数分後、自販機の周りにはヨーグルツチパックが転がっていた。

「満足か？」

「ダーブ!!」

御機嫌なベル坊を見てホットする男鹿の後ろに数名の不良が来た。

「おい、ヨーグルツチを買い占めやがったぜ！」

「なんてことを…あの神崎さんがきれるぜ!!」

「あん？神崎？」

と、その時男鹿はあることにひらめいた。

「おい、お前ら…神崎ってのは何処だ？」

ベル坊の親探しが始まった。

同時刻、石矢魔高校前では

「やっとなつたぜ！待ってるよー！神崎！！」

意気込む窪谷須の後ろを透明化でついてくる男が1人
僕だ。

心配だからついてきてしまった。まあ、窪谷須は強いし大丈夫だと思うが暴力事件でPK学園がテレビで報道されるのは面倒だからな。
出来るだけ平和的解決になるようにしないと。

(全員ミンチにしてやるぜ!!!)

…無理っばいな。

その後、ほかの不良とイザコザがあつたがなんとか神崎一がいるクラスに到着した。

(ダチがやられて半年…とうとう奴が帰ってきたぜ！隣町だからと
いってみすみすこの俺がこんなチャンスを逃す筈がねーだろ！
待っているよ！石矢魔東邦神姫の1人神崎一　　ダチの敵は俺が
とる!!)

前と同じことを言うのな。

ドーン

と目の前の扉を蹴破って窪谷須は突撃した。

「おらあ、神崎!!!」

「あん？誰だお前？」

そこには唇にチェーンをつけた男とその周りに何人もの不良がたむろっていた。

これが神崎か…唇にチェーンをつけてまさにヤンキーそのものだ。だがまあ…この中で一番強そうなのは神崎じゃ無く一番不良に見えないあのロン毛のイケメンか。

「俺は窪谷須亜蓮、襟足の亜蓮だ!」

「窪谷須亜蓮だと!?」「まじかよ!仕返しに来たのか!」

あたりの不良がざわめいてる中、神崎はくすくす笑っていた。

「あーあの亜蓮か! あの姫川みたいな頭はどうした!? すっかり丸くなりやがって! 姫川も少しは見習って欲しいものだぜ!」

「東邦神姫の姫川か、今はあいつは関係ねー!それより半年前の決着!今つけて」

「おーい、神崎君いる?」

と、その時蹴破って空いた扉が無くなった場所に子供を背中に乗せた男が立っていた。

あいつは…

「子連れ番長男鹿辰巳…」

と、ロン毛のイケメン夏目慎太郎は呟いた。

「噂のスーパールーキーが俺に何のようだ?」

神崎を巡って両者対決、次回決着!?

神崎一のΨ難 ダイブは突然に

俺の名前は窪谷須亜蓮かつて炎栖覇を率いていた番長だ。

当時俺は遠征で石矢魔高校の東邦神姫の1人神崎一を倒す為乗り込んだ：奴と俺は決闘で互角の戦いをしていた。だが！

「亜蓮さん！俺も戦います！」

と、俺のダチ達が乱入してきた：正直、俺に手を貸してくれるのは嬉しい：だがこれは『漢』と『漢』の決闘。手出し無用だ！そう言うおと止めに入ったが：

「せっかく面白そうだったのに：邪魔するなよ。」

神崎の部下のロン毛の野郎に俺のダチはぶちのめされた。

「お前ら!!」

俺は悲しみに満ち溢れ、ソイツに殴りかかった。だが返り討ち遭い結果惨敗した。

それから数ヶ月俺は転校し真人間になろうと不良を卒業しPK学園の生徒として日々を送っているた：だが！その隣町にやつの学校があると知った時！俺は決意した！あの時の決着をつけてやる!!つと

そして現在：俺の前には神崎とあのロン毛の奴もいる：あの時と同じシチュエーション：フツ、悪くはねー！ここで終わらせる!!

と思っていた時赤ん坊を背負った不良が乱入してきた。

ナレーションは斉木楠雄に戻る：

窪谷須、今までの解説ご苦労：さて今現在何も考えずにこの男、男鹿辰巳は神崎一に魔王の子を押し付けようとしているわけだが：やはり馬鹿らしくその後の話の流れを考えてきていないようだ。ちなみに今の僕は透明化で誰も気づいていない。力は使えなくなるがまあ必要ないだろう。

「神崎君ってのいるう？」

「おい、今取り込み中だ後にしろ！」

窪谷須、ソイツに近づかない方がいいぞ。面倒なことになるぞ。

「どうだ？ベル坊？いい奴いるか？」

ハイ無視。そのベル坊は周りのヤツらを見て深く考え込んだ。その時古市が間に入ってきた。

「男鹿！何してんだ！？！すいません、コイツ神崎さん達の部下になりたくて乗り込んだんで！」

古市が場を和ませようとしたが城山は男鹿に近づいた。

「お前が男鹿辰巳か？俺はなお前のようなルーキーを何人も…」

何かを言い終わる前に男鹿は顎に1発不意打ちし瞬殺した。

「クハハハッ いいだろう。ようこそ3年A組へ、」

「待つてくださいい!!!」

その時、城山は鼻から血を出しながら起き上がってきた。

「その男は危険です！神崎さん！信じてください！」

必死に説得する城山に神崎は命令を出した

「立てるか？ならそこから飛び降りろ」

コイツ…自分の部下に何言っている？

「ふざけんじゃねー自分の部下にそんなこと言うやつは番長じゃねー

！神崎！俺が相手だ！ゴハッ」

窪谷須は殴りかかろうとした時が男鹿に蹴り飛ばされた。

「何しやがる！」

「やっぱお前らじゃなかった…」

「あ？」

神崎と窪谷須はきよとんとした時男鹿はニッコリ顔で呟いた。

「お前が飛んでけ」

その瞬間神崎は顔面パンチをくらい窓を突き抜けダイブした。

アイツ！ このままでは奴は3階から落下し死んでしまう。そう
思い僕は窓を破り落下した。なあに僕はこの高さから飛んでも死に

はしない、そして僕は校舎を蹴り神崎よりも早く落下し無事受け止めた。

「あ、ああっあ」

どうやら息はあるようだ。地面は受け止めた時に割れてしまったが仕方がない。復元能力を使う暇がないからさっさと瞬間移動して帰るか。

その後僕は瞬間移動して家に帰った。そして後日、学校には窪谷須がいつもどうり海藤達と話していた。

「おう、斉木！ 俺は不良とは完全に縁を切ったぜ！」

あの後何があったのかは分からないが結果丸く収まったようだな。神崎以外は。できればこれからはアイツらとは関わりたくはないな
：

だが東邦神姫の一角を倒した男鹿は他の東邦神姫に目をつけられ、斉木楠雄もその戦いに巻き込まれるのだった。それは斉木楠雄にとって夢にも思わなかったΨ難の幕開けだった：